

夕日とびわの実

安田 多香子

●大学の新生

一九九八年に移転した愛知県立大学は、名古屋市郊外の丘陵地に、西に大きく開いて建っている。天気の良い日の夕暮れ、真っ赤な夕日が山際に沈む。白くデザインされたいくつもの建物が夕日に染まって美しい。私はこの愛知県立大学の図書館で働いている。学生数二十人程度の公立大学である。移転を機に、学部・大学院を増設、移転前と比べ、図書館は約三倍の広さになり、全面的にコンピュータ化された。

●びわの種

実は、二十三年前、私がまだキャピキ

ャピの若者だった頃、二年間だけこの県立大学図書館に勤務していた。もちろん、カードは手作り。タイピストの打つ和文タイプで原稿を作り、小さな謄写版で印刷していた時代である。その頃、図書館の裏口の階段に腰掛けてびわを食べたことを覚えていいる。大きなびわの種を「芽が出るかもしれない」と裏口の横に埋めてやった。その翌年、思わぬ転勤になった。結婚・流産・出産・育児に追われ、流れるように時が過ぎ、すっかり忘れていた頃、「びわの実がなるようになったよ」と風の便りに聞いた。十年後に転勤、さらに転勤。看護学校図書室、医学図書館と仕事の内容が変わるにつれ、図書館員として勉強が必要なることを痛感してきた。よもや、と思っていた県立大学へ転勤が決まったのは二年前だ。移転後の跡地は今、県立高校の仮住まいになっている。二十二年振りに旧キャンパスを訪れてみた。「この辺が本部…、ここが図書館…」二十二年前の記憶は、あまりにも

おぼろげだ。「あ、あった」びわの木は二階に届くかと思うほどの大木になり、深い緑の葉が茂り、小ぶりだが黄色い実をいっぱい実らせていた。「この二十二年の間：私は何をしてきたのだろう」たったひとつの種がこんなにも大きく成長した。

●「紙」から「電子」へ

私は二年前まで「速く、すぐ情報を」という医学図書館の世界にいた。九〇年代に、コンピュータネットワークは急速に発展してきた。二一世紀には理科系の図書館にとって「紙」から「電子」への移行は必須である。技術的にはすっかり実用の段階に入った。主要な Journal で電子化されていないものはない、と言えるほどだ。医学の重要なデータベース「メドライン (Medline)」も一九九七年六月に劇的に無料で提供されるようになった。リンクされた電子ジャーナルの論文はすぐにデリバリーされるようにさ

えなっている。今後の課題は、価格をいかに決定するか、契約、支払い、利用はどうするのか、共同利用のグループを作ることができるか、利用者と直接デリバリーされる論文のあいだに「図書館」の果たす役割はどこにあるのか、「雑誌」という形態はどう変化していくのか、ということである。

●文科系大学では

文科系大学の図書館にとっても、ある種の部分は、電子媒体で、情報の共有が広がっている。それまで、直接その図書館に出かけないと見ることのできなかつた貴重な本やコレクションが次々に開放されつつある。また、レファレンスでは、若い図書館員が「インターネットのない時はどうしていったんだろう？」というくらい欠かせないものになってきている。例えば、「○○さんについてどんな情報でも知りたい」という時、サーチエンジンを（たとえば、gooとかExileなど）を

使えば、ヨーロッパの新聞の記事からでも容易に探し出してくる。いまや、いかに使いこなせるかが問題になっているのだ。だがその一方で、人文・社会科学の研究においては、蓄積された「本」というものが価値を持つ世界でもある。印刷技術が未発達だった写本の時代、版木の時代、古活字の時代、そしてようやく活版印刷の時代と連綿と引き継がれてきた「紙」の「本」は過去の人々が何を考え、何を伝えようとしていたのかを知ることができる。そしてまた、私たちに言い知れない安堵を与えるものだ。

図書館フリークの学生が何人かいる。「よく勉強してるね」と話しかけると「図書館に來ないと落ち着かなくて……」と言う。図書館利用教育の時、貴重書庫へ案内する。内装の総木張りですがすがしい。一様に「うわー」と歓声がある。うっとりとしてなかなか出たがらない国文科の学生もいる。千八百平米の地下の書庫へ案内する。「本がいっぱい……すこ

い。」と感心する。「こんなに本がたくさん読めると思うとうれしくって……。」と感想を書いてくれた学生もいる。とりわけ熱心なのは社会人学生である。いったん社会に出てからこそ「勉強したい」と思うものだ。

●変わらぬもの

新しいキャンパスで夕日を見ながら、「変わらぬもの」は何だろうかと思う。二十年后、百年後、太陽は変わらぬ光を放ち続けるだろうか。今、次々に遺伝子の解明が進んでいる。クローン羊も誕生した。遺伝子治療も進むだろう。しかしそれでも一つのびわの種からあんなにもいきいきとした生命が育まれたような、生命の神秘は変わらない。人類の編み出した文字から「考える」ことが始まった。その素晴らしい人類の遺産を絶やすことなく伝えるという幸せが百年も千年も続くことを願わずにはいられない。

愛知県立大学図書館 やすだ・たかこ